

時空を超えたマルクスとピケティの対話

登場人物：カール・マルクス (M)、トマ・ピケティ (P)

東商連 齊藤学

3月28日、フランスの経済学者トマ・ピケティの著書『21世紀の資本』について、和光大学の竹信三恵子教授を招いて研究会を開催しました。研究会ではピケティの著書について活発に議論が盛り上がりました。参加された、齊藤学さんから、マルクスとピケティの時空を超えた対話(創作)をいただきました。(事務局 田中)

M 『21世紀の資本』随分と売れているようですね。

P 世界では160万部。日本では13万部ほど売れました。しかし『聖書』に次ぐあなたの著書『資本論』には到底及びませんよ。

M 聞くところによると君は私の『資本論』を読んでいないようだね。

P はっきり言って『資本論』は、難しすぎて読みづらく苦痛です。大体、経済データがほとんどありませんよね。

M ハッハッハ。そうきましたか。私の時代は君がしたような「ビッグ・データ」をコンピューターで分析できるような技術はないからね。

18世紀までさかのぼって、データを根気よく集め、 r (資本収益率) $>$ g (経済成長率) から「格差」が大きく生じていると警鐘を鳴らし、「資本税」などの提言をしていることは評価するよ。しかし「資本」の定義が曖昧だ。私は「生産過程に投入され次々に変態していく価値の総体」を「資本」と定義している。ここでは「労働力商品」のみが価値をつくり出す特殊な性質を持っていることがポイントだね。

P ウーム。さっぱりわかりません。「生産物から生じる儲けはすべて労働者が得るべき」ということでしょうか。私有財産を廃絶するとたとえば官僚に権力を与えることになり、労働者はいっそう自由を奪われますよ。

M ひょっとして君の「社会主義モデル」は、崩壊したソビエト連邦かい？

P そうですよ。1991年、私はモスクワを

訪れ共産主義独裁体制の崩壊を目の当たりにしました。なぜ人びとが私有財産制を廃止し社会主義を目指したのかその訳を知りたいと思いました。さらに社会主義国の失敗モデルから不平等と資本主義をコントロールする、より良い手法を見つけられないかとも考えていました。

M もし君がソ連を「社会主義国」というならば、私自身は「社会主義者ではない」と断言したいね。ソ連は私の思想をまったく変質してしまった。とりわけスターリンの罪はどうしようもなく大きかった。

P 私の分析ではソ連がエセ「社会主義国」だったとしても、「冷戦」時期に西側諸国は、人びとが社会主義に希望を抱かないように福祉国家や社会民主的政策を取り入れ結果として格差は縮小しています。「冷戦」が終焉後は、新自由主義が台頭し、現在の格差社会がまた広がってきましたが。

M フムフムなるほど。

P ですから政治的な共同体の統合を進めグローバルな金融資本主義を民主主義のモデルチェンジで再びコントロールすることが私の主張です。

M 「アンダーコントロール (嘘っぽい言葉)」が可能というが、原発と同じでそれはできないんだよ。私は『資本論』で「商品」の分析から始め、次に「貨幣」そして最後に「資本」の正体を明らかにした。「増殖する価値」=資本は、常に「利潤」を求め続け人知を超えた運動をする。この運動は有機的身体である人間が非有機的身体である人間(自然)を取り込んで行く過程と同じ構造を持っており……。

P あのマルクスさん。何を言っているのかまったく理解できません。

M とにかく私の『資本論』を一度じっくりと読んでくれないか(怒)。

感想一言：「資本」がやっかいな代物であることがよく分かりました。(齊藤)